



CREDUON FOR TEACHERS

SEED
SWITCH ON CREATIVE MIND FOR EDUCATORS
CREDUON

表紙イラスト

正木 賢一 / Kenichi Masaki

東京学芸大学 准教授

NPO 法人東京学芸大こども未来研究所 理事



Gibraltar
ジブラルタ生命

Contents

はじめに	02
「CREDUON」について	03



2020年8月 新しい病原ウイルスと共生するための健康教育	04
(Vol.191) ①感染症とその予防	
(Vol.192) ②学校における感染症対策の現状	
(Vol.193) ③新型コロナウイルス感染が開く新しい社会の扉とメンタルヘルスの課題	

2020年12月 「学校から職場への移行期」の教育を考える	07
(Vol.203) ①日本のキャリア教育・欧米の職業教育	
(Vol.203) ②アジア諸国と日本のキャリア・職業教育	
(Vol.204) ③未来の大学のキャリア教育とは	



2020年6月 朝の広場の時間	10
(Vol.105) ①子どもたちへのメッセージ	
(Vol.106) ②子どもたちへのメッセージ	

2020年7月 学校における特別支援教育1	12
(Vol.107) ①高等学校におけるインクルーシブ教育 誰もが安心して受けられる授業を目指して	
(Vol.108) ②小学校における特別支援教育 スモールステップがクラス全員参加の授業にする —音楽の授業実践から—	



2020年3月 H先生とA君	14
(Vol.035)	

2020年9月 “よさ”を大切にする	15
(Vol.041)	

Archive 2020年1月～2021年12月	16
--------------------------	----

おわりに	19
------	----

はじめに



『SEED』Vol.4をお届けします。今回も監修をさせていただき「CREDUON」に掲載された『VISION』、『ELEMENTS』『HUMAN』の中から2本ずつ選定させていただきました。

2020年度は、コロナ禍で教育界も大変な状況になりました。この一年間は、各学校において感染症対策を講じながら「学びを止めなかった」ことに尽きるのではないかと思います。先生方のご苦労と工夫に敬意を表したいと思います。

まず『VISION』からは、まさに新型コロナウィルスと共生するための健康教育について及び、今後のキャリア教育に関する新視点について言及された記事を選びました。コロナ禍においては、私たちは自分の体は自分で守るということの意味、意義が再認識されました。キャリア教育の概念でも、コロナ禍の影響で変化してきているという視点は確かにその通りだと考えさせられます。

次に、『ELEMENTS』からは、今までになかった視点として校長講話についてと、今回も特別支援教育に関する話題をピックアップしました。2つの話題から、「考える」ことの重要性が受け取れます。話を考える、子どもにあった授業を考える、そして、子どもたちにも考えさせることの大しさが伝わります。この一年、私たちはいつも以上に考える時間を得たようにも思います。

そして、『HUMAN』からは、「恩師と教え子との関わり」と、「教師として大切にしていること」について述べられている話題を紹介させていただきます。ともに「人と人とのつながり」がテーマになっています。日常的になかなかつながることができない経験をしてきている今、つながることは私たちにとってとても大事でかけがえのないものであると、改めて感じます。

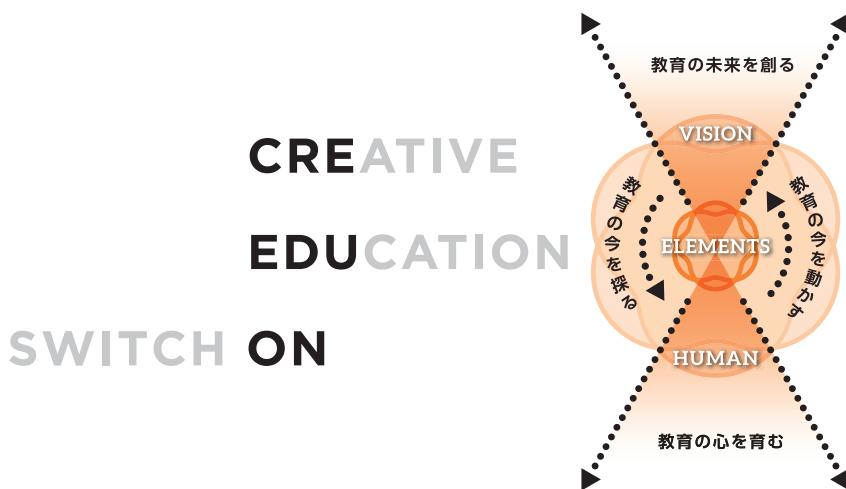
Vol.3の巻頭言で、何かしらの方法で読者の皆様と双方向的な情報交換をしたいと述べました。図らずも、対面による情報交換がなかなかできなくなってしまったことで、より強く思います。CREDUONのようなインターネットのサイトやこのような紙面を通じて、私たちはつながることができ、関わることができ続けているということは、ありがたいことだと考えています。今後ともよろしくお願ひいたします。

東京学芸大学 教授
NPO 法人東京学芸大こども未来研究所 理事
鈴木 聰

「CREDUON」について

「CREDUON」(<https://creduon.jp>) は、東京学芸大学とジブラルタ生命保険株式会社、NPO 法人東京学芸大こども未来研究所の三者で、学校教職員を対象とした情報提供メディアを通した業務活動支援に関する研究開発の一環として、2014年11月よりスタートしました。

「CREDUON」とは creative + education + on を組み合わせた造語であり、誰もが「クリエイティブな教育マインド」を発揮できるよう、私たちはそのスイッチを「オン！」するメディアでありたい、との意味を込めました。



4年目になる2017年11月に、「CREDUON」は学校教育の情報に限らず、広く教育に関わる情報を配信する web マガジンとしてリニューアルし、それまで「CREDUON」として発信していたものは「CREDUON FOR TEACHERS」として継続していくことになりました。

掲載されてる内容は下記の3つのカテゴリーに分類され、毎月、新たな記事を掲載しています。

- VISION：「教育の未来」をコンセプトとし、教育に関わる先端の情報の提供。
- ELEMENTS：コンセプトは「現場ですぐに役立つ情報」。普段の授業づくりや児童・生徒指導などの学校業務のヒントになる情報を提供。
- HUMAN：「積み重ねが人をつくる」がコンセプト。あるテーマに基づき、執筆者の背景などをうかがう内容を提供。

① 感染症とその予防

2020年7月1日現在、新型コロナウィルス感染症者は累計で1,000万人を超え、世界中で未だこの感染症対策は先が見えない状況が続いています。有史以来、天然痘、ペスト、結核、スペイン風邪など、感染症は人類に脅威をもたらしてきました。しかしいずれの時代も人間の知恵と勇気によって、私たち人類は感染症を乗り越えてきたといえます。

そこで今日は、感染症とその予防の基礎基本について概説します。

1) 感染症の基本

感染とは、ウィルスや細菌、真菌等の微生物が人など（宿主）の体のなかに入り、臓器や組織で発育したり増殖したりすることをいいます。感染には、症状が現れる場合（顕性感染）と、はっきりとした症状が現れない場合（不顕性感染）があります。不顕性感染者が問題となるのは、自分が感染していることを知らずに、感染源として感染を拡げる可能性があるためです。また、病原体が体内に侵入してから発症するまでの期間を潜伏期間、感染によって症状が現れた状態、病気の起きた状態を感染症といいます。

感染症が発生する要因は、原因となる病原体、病原体が宿主に入り込む感染経路、感染の受け安さである宿主の感受性の3つです。主な感染経路は、接触感染、経口感染、飛沫感染、空気感染（飛沫核感染）などであり、感染症の収束には、感染経路を経つことが重要となります。

2) 感染症の予防

感染症対策として重要なことは、感染症の予防と、発生後に拡大を防ぐことです。

感染症の予防には、発生要因である感染源、感染経路、感受性者（病原体の侵入を受ける人）への対策、時期として感染前、発生時、流行時の対策、さらには個々の感染症の特徴に応じた対策が必要となります。

社会が行う感染源や感染経路への対策には、環境衛生活動や検疫などがあります、個人が行う感染源対策には、食品の衛生管理など、感染経路への対策には、石鹼での手洗い、マスクの着用、うがい、換気などがあります。さらに感受性者対策として、予防接種や、十分な睡眠やバランスのよい栄養等の基本的生活習慣が重要となります。なお感染症が疑われた場合には、健康観察を十分に行うとともに、速やかに受診することが必要です。

さらに、感染症予防対策としては、米国疾病管理予防センター（CDC）から出された院内感染のガイドラインである標準予防策（Standard precaution）が参考になります。この標準予防策に従うと学校では、手洗いや手指の消毒などの手指衛生を基本とし、消毒や清掃など学校環境衛生の維持管理を行う必要があります。咳エチケットとしては、咳やくしゃみがあるときにはマスクなどを用いて鼻や口を覆うことが大切です。

こうした感染症予防策としての管理の徹底とともに、児童生徒に対しては健康観察の必要性や方法などを教え健康教育を行う機会とすることが望まれます。

感染症の理解と対応のため、文部科学省の「学校における感染予防のための手引き」、厚生労働省の「保育所における感染症対策ガイドライン」「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」「予防接種法」を参照してください。



ここでは、前回に続き感染症発生時の対応と、新型コロナウィルス感染症対策禍、学校再開となつた現在の学校の取り組み状況について紹介します。

1) 感染症発生時の対応

感染症が発生した場合には、感染症の拡大を防ぐために早期発見と初期段階での適切な対応が重要となります。そのため感染症発生時に、養護教諭など対応する担当者と役割をあらかじめ決めておくとよいでしょう。

そのうえで、学校内で感染症が発生した場合、各教員は、所定の様式による健康調査票や健康観察票に従って、発生状況や欠席状況、健康状態を調べ、養護教諭等の担当者に報告します。さらに養護教諭等は、管理職に報告するとともに、教職員に状況を周知し、児童生徒への手洗いや咳エチケットの指導を徹底し、感染拡大の防止策を講じる必要があります。さらに感染拡大防止策として、学校保健安全法で定められた出席停止（第19条）や臨時休業（第20条）などの措置をとる必要があります。

2) 学校の現状と今後の課題

日本健康相談活動学会では、学校での新型コロナウィルス感染症対策の現状や困難点などについて、養護教諭に緊急アンケートを行いました。

その結果、学校においては、健康観察の徹底、感染症の知識や予防方法、手洗いなど健康教育の充実、消毒の徹底、保健室等で清潔と不潔をいくつかのレベルに分けるゾーニングの工夫、教職員の研修会の実施、授業や給食、清掃等学校の生活時間の調整、体調不良者の対応ルール作りや相談体制、感染症者発生時のフローチャートやマニュアル作りなど、多種多様な対策が行われていました。

一方で課題としては、感染症対策に関することはもちろん、それ以外の児童生徒の健康課題が多く指摘されています。例えば、家庭での自粛期間が長期に及んだことにより、子どもたちの生活リズムの乱れや体力低下のおそれがあること、登校しぶりや不登校の懸念があること、学習の遅れを取り戻すための過度の課題やストレスがあること、心身に課題のある子どもの対応が遅れがちなこと、虐待や貧困など脆弱な家庭環境にある子どもたちへの安全の確保や支援が遅れていること、などです。

今後、新型コロナウィルス感染症の第2波、第3波に備え、教職員が正しい知識と情報のもと、地域の状況に合わせた感染症対策を講じることはもとより、今、目の前にいる児童生徒の生活や心身の状態を見極め、ニーズにそった教育を行うことが求められます。

日本健康相談活動学会のホームページでは、行政からの情報や、養護教諭へのアンケート結果、学校で行われている様々な実践を精力的に紹介しています。参考に御覧ください。



日本健康相談活動学会ホームページ

<http://jahca.org/top/>



中国武漢で初めて謎の肺炎による患者が報告されたのは、2019年11月22日です。翌年の1月7日には、謎の肺炎の原因が新型コロナウイルスであると特定されました。しかし、すでにこの時点では、このウイルスは中国の国外に出ていたと推測されています。それから半年経った現在、世界で1千万人を越える感染者が確認され、50万人を越える人が亡くなっているのです。その感染拡大のスピードと広がり、影響力は脅威と言わざるを得ません。

世界の有力メディアは、日本政府による新型コロナウイルス対策は全てが失敗に思えるが、結果は不思議と成功していると驚きの報道をしています。その原因を生物医学的に究明しようとプロジェクトが立ち上がっていますが、その一因として日本国民の自粛生活とソーシャルディスタンスの遵守、マスク装着や手洗いなど衛生行動、衛生観念の高さ、清潔な地域環境の保持などの日常的な社会的健康行動の力も見逃せません。幼児教育から「衛生教育」に取り組んできた学校保健の貢献もあります。これからも人類はウイルスと共存して生きるとすれば、リモートワークやリモート教育、三密を避ける行動様式、経済活動と感染症対策が両立する社会の在り方を、持続可能なライフスタイル、新しい社会構造・社会秩序とすることは必須でしょう。このことは世界が Sustainable Development Goals (SDGs) に真剣に取り組まなければ、さらに大きな代償を支払うことを意味しています。SDGs の実現に貢献しようとした企業・団体、公共機関、教育機関は、社会的責任を果たしていると言えなくなるでしょう。

一方で、感染症の恐怖や不安、無力感に加えて、自粛に伴う生活様式、経済活動、社会関係の大きな変化は、とてもストレスフルな出来事で、イライラしたり、攻撃的になったりするでしょう。感染症は偏見や差別を生み、社会的排除、魔女狩りをもたらすことも歴史的に明らかです。日本では、感染拡大が年度の切り替わり時期に当たり、人生や社会で重要なイベントや役割がなくなるという喪失体験や宙ぶらりんの体験も、ボディブローのように効いてくるでしょう。そこで懸念されるのがコロナうつ、コロナ疲れです。

日本うつ病学会は、HPでこのような状況下での「こころの健康維持のコツ」11か条の日本語訳版を公開しています。

ポイントを要約すると、①決まって行う日課を設定する、②規則正しい生活をする、③一定時間屋外で過ごす、あるいは④2時間程度、日光を浴びて過ごす、⑤ルーティンの活動は、同じ時間に行う、⑥できれば決まった時間と場所で、毎日運動する、⑦決まった時間に食事を取る、⑧気持ちを分かり合える人とのコミュニケーションを保つ、⑨昼寝はできるだけ避ける、⑩夜間明るい光、とくにパソコンやスマホのブルーライトを避ける、⑪起床と就寝の時間を決め、睡眠のリズムを保つ。

詳しくはHPで確認して下さい。

<https://www.secretariat.ne.jp/jsmd/gakkai/teigen/covid19.html>



新型コロナウイルスのパンデミックのような解決困難な事態に対しては、事態の改善に無理な力を注いだり、淡い期待を抱くよりも、時には自分の見方や考え方を変えて事態を受け入れ、そのなかで新しい価値や活路を見いだすことでも、メンタルヘルスを保つ上では有効な方法となります。

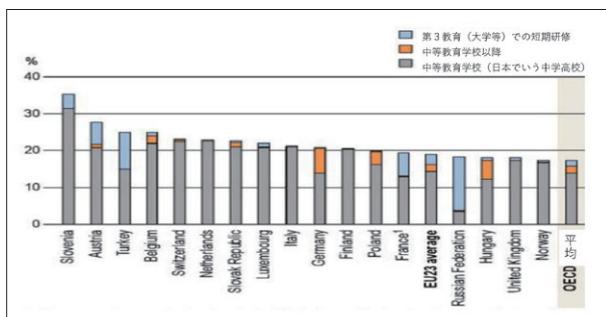


「学校から職場への移行期」の教育を考える

「キャリア教育」という文言は、1999年の中教審議会において初めて登場します。2004年には「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議」による報告書が出され、児童・生徒・学生に対して「自己と他者や社会との適切な関係を構築する力を育て、将来の精神的、経済的自立を促していくための意識の滋養と豊かな人間性の育成」が必要と提言されました。ここではキャリア教育と職業教育はまだストレートに結び付けられていませんでした。



ですがその後、2008年の中教審答申で「職業指導（キャリアガイダンス）を適切に大学の教育活動に位置付けることが必要である」と提言されました¹。筆者はまさにその年、文部科学省による事業「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」に採択された「東京学芸大学のキャリア学修支援事業」に携わることになりましたが、当初「キャリア教育とは、いったい大学で行う教育なのですか？」という疑問をしばしば投げかけられたものです。それまで、日本の学校教育の範疇では、専門高校などを別にすれば、職業教育は一般教育に直接結びつかないものと考えられ、「職業能力の開発」は就職後の企業内において行われると理解されていたからです²。



ヨーロッパ諸国に目を向けてみると、職業訓練は教育の中で体系化されています³。フランス・スウェーデンでは国家が主導して職業訓練制度を強化しています。例えばフランスでは、「職業訓練」の場を学校教育に求めることができ、学位や職業資格は公式に格付けされ、そのポストや賃金は連動するもの

として社会的に認知されています。一方で、ドイツ語圏・オランダ・デンマークでは、企業間コードィネイションや労使協調により、公的教育内での職業訓練が発達しています³（図⁴参照）。

他方、アメリカやイギリスなどの英語圏では、ヨーロッパと異なり、国からの支援は期待できず雇用保障も低いため、自己資金による高等教育への進学を通じて技能を獲得していきます³。

次回は、アジア諸国と比較してキャリア・職業教育について考えていきたいと思います。

[引用文献]

- 永作稔・三保紀裕〔編〕(2019).『大学におけるキャリア教育とは何か』ナカニシヤ出版
- 中上光夫(2007).「フランスにおける「職業訓練」と職業資格」,『国際地域学研究』,10, 47-60.
- 山内麻里(2019).「各国の教育訓練システムの特徴」,『欧州の教育・雇用制度と若者のキャリア形成』.白桃書房
- OECD (2020). Participation of 15-24 years-olds in vocational education training, by level of education, Education at a Glance, DOI: <https://doi.org/10.1787/69096873-en>





前回は、欧米と日本のキャリア・職業教育の違いについて述べましたが、今回はアジア諸国との違いについても触れておきたいと思います。筆者は2016年九州大学第三段階教育研究センター主催の国際学会に参加させていただきました。日本とアジア諸国間の第三段階教育（日本でいうところの中学校以降の高等教育を意味します）におけるTVET（技術・職業教育及び訓練）が議論されました。その

中で、第三段階教育修了者に対して技術資格や技術を示す学位をアジア共通のものとした認定制度を作ることで、技術者の労働移動をアジア諸国間で活性化できないだろうかという内容が話し合われていました。アジア各国の推進的な議論の中で、日本側が難色を示していたことが印象的でした。

このアジア諸国間の連携の動きは、ヨーロッパ諸国のボローニャ・プロセスを受けてのものであろうと考えられます。ボローニャ・プロセスとは、1999年にヨーロッパ29か国の教育相がイタリア・ボローニャに集まり、域内の労働移動を促進するために、各国の様々な職業資格や学位を標準化し比較可能とすることを合意したことから始まります。3年後の2002年には、各国の職業資格や学位を8つのレベルからなる欧洲資格枠組み（European Qualification Framework: EQF）に当てはめて標準化することも決定されました¹。アジア諸国は、欧米による植民地時代を経て、職業教育に関して欧米にかなり準拠していると思います。

しかし、日本においては、就職後企業内において技術教育がなされる文化があることから、企業横断的な職業訓練制度は不在です¹。それだけではなく、中等教育高等教育とも進級や卒業の難易度がそれほど高くないこともあります。学位や資格が技術力を証明しているものとは企業から認識され辛い実情もあります。かといってそれが日本の新卒採用の秩序を乱すわけではなく、機能してきたことも事実です。

ところが、コロナ禍の影響で、日本のある意味緩やかなキャリア教育が、変化せざるを得なくなっているようです。企業によるジョブ型雇用へのシフトです。次回は、これからの日本のキャリア教育への展望を考えていきます。

[引用文献]

¹ 山内麻里（2019）.「各国の教育訓練システムの特徴」,『欧洲の教育・雇用制度と若者のキャリア形成 国境を越えた人材流動化と国際化の検討』白桃書房



コロナ禍によりテレワークが一気に進み、最近新聞でもいくつかの日本企業がジョブ型雇用に転換したという記事を目にするようになりました。ただ日本の経営は「メンバーシップ型」（職務を固定されない、会社に紐づく働き方）で欧米型は「ジョブ型」と、単純に区別されるものでもないようです¹。日本でもパート・アルバイトはジョブ型雇用に極めて近く、欧米でも上級ホワイトカラーはメンバーシップ型に近い働き方をしているからです²。さらに、ジョブ型雇用を成果主義と短絡的に置き換えることも誤解のようです。



ジョブ型雇用とは、年齢と待遇を切り離し、職務と待遇を紐づけるものです。適切な待遇を付与するためにも、評価プロセスを明確にしなければなりません。そのため、部下に対する上司の日々の承認とフィードバックが不可欠となります。上司の恣意的な評価にならないよう、「職務記述書」を整備することによって職責を明確化し、成果見える化させる仕組みです³。日本においては、まず管理職からジョブ型の導入が始まり、新卒一括採用は大きく変えずに入社後10年前後はジョブローテーションをし、その後、職務別の等級制度に移行し、職務別の働き方を辿るキャリアになると、専門家の見方があります⁴。

産業構造が変化する中、キャリア教育はどのような方向性を目指していけばいいのでしょうか。日本の大学でのキャリア教育は、各大学の文脈により独自に発達しており、教養教育として開講されているものや、単に就職活動時のスキル支援として位置づけられているものなど、多岐にわたります。筆者の個人的な意見となりますが、大学での高度専門的な学びが、職業社会に結びつき、その専門的な知識を常にアップデートさせながら将来的な企業間移動を可能にする教育、それが大学におけるキャリア教育なのではないかと考えます。そのためにも、大学での高度な専門性が、どの職業で活躍できる知識を醸成できるのか、どの国家資格等と結びつく深い学びができるのか、大学がそのアカデミック性と職業の関連を明確にした教育をしていくことが必要であると思います。

[引用文献]

- 1 山崎憲 (2017). 「人事労務管理と人的資源管理における internal と external—日本の経営とジョブ型を超えて—」『労務理論学会誌』, 26, 5-20.
- 2 小林祐児 (2020). 「日本のジョブ型雇用 (2)」日経産業新聞 (2020年10月16日) p14.
- 3 小林祐児 (2020). 「日本のジョブ型雇用 (6)」日経産業新聞 (2020年10月22日) p14.
- 4 小林祐児 (2020) 「日本のジョブ型雇用 (8)」日経産業新聞 (2020年10月26日) p11.



(1) 子どもたちへのメッセージ

児童を目の前にして語りかける「朝の広場」での校長講話は、子どもたちの反応がダイレクトに返ってくることを期待して、私なりに色々と工夫をしてみました。できるだけ幅広いジャンルから、わかりやすくメッセージを伝えることをモットーに、年間約25回、通算100回ほどの話をしましたが、初めの頃は、大きなスケッチブックを使ったり、実物を持ち込んだりして試行錯誤の日々が続きました。初年度の3学期に、映像を見せながら話すことを試したところ、話を聞く子どもたちの反応に大きな変化があったのを見て、徐々にスライドを見せながら話すスタイルに変えていきました。また、映像を加えることによって、言葉だけでは伝わりにくい内容でも扱えるようになり、年齢差をあまり気にしないで、様々なテーマを設定することができるようになりました。



写真1 スライド7：話のきっかけとなったボケの花のクローズアップ

写真（写真1）をもとに話しを考えました（表1）。最終的には、「知らないことが分かるって楽しいね」というメッセージをゴールとしましたが、話の進め方については、起承転結などは気にせず、子どもたちの興味が途切れないように組み立てました。また、話の内容に適した写真や動画、イラスト等を、あれこれと差し替えながら、ストーリーを決め、スライドの流れに言葉をのせていくようにしました。それはちょうどメロディーに歌詞を付けていくような感じです。

話のテーマに沿って進んでいくと、自分でも新しい発見があり、それが準備のモチベーションとなります。この時に見つけためずらしい花は、「源平咲き」というもので、源平合戦の源氏（白旗）、平氏（赤旗）から来ていることを初めて知りました。この場面は文字とイラストで表すこととし、低中学年がイメージしやすいように、運動会の時

【朝の広場(校長講話)】	
実施日	2017.2.23
背景	梅の花が咲き始め、春の訪れを感じられるようになる
設定理由	めずらしい花を発見した感動の共有。調べることの楽しさを伝える
内容	「源平咲きについて」＊実際のスライドにはタイトルは付けていない
伝えたいこと	「知らないことが分かるって楽しい」 興味・関心
キーワード	花、紅白、源平合戦

スライドの内容			
朝の広場 2017.2.23			
スライド No.	項目	映像の種類	備考
1	オープニング	写真	児童の特別活動の写真
2	梅の花1	写真	梅林の写真（遠景）（何の木かな？）
3	梅の木1	イラスト	花札「梅にウグイス」（梅は昔から親しまれてきた）
4	梅の木2	写真	尾形光琳「紅梅白梅図屏風」（見たことがあるかな？）
5	梅の花2	写真	1本の枝に紅梅、白梅の写真（中景）
6, 7	ボケの花3	写真	1枚の花びらが紅白に分かれている写真（近景）
8, 9, 10, 11	アサエクライズ	文字・写真	ボケの花3：咲き方の名前は？ 3択問題
12	クイズの答え	文字・写真	正解：源平咲き（源平合戦と紅白関係あるの？）
13	ボケの花3	写真	結び <知らないことが分かるって楽しいね>

表1

に紅組・白組に分かれて戦うことも、源平合戦から来ていることを言葉で付け加えました。情報の8割は視覚からと言われていますが、映像を見せなくても、想像できるところや、少し考えてほしいところは、出来るだけ言葉で伝えるようにしました。さらにメッセージに関わる場面では、イラストやクローズアップ写真を使ったり、少しゆっくり話すなどの工夫もしてみました。



映像を交えることで、話の内容にも幅が出てきた「朝の広場」の校長講話ですが、内容がなかなか決まらないこともあり、ふだんからネタ探しをするようになりました。自分の専門である美術に関すること、インターネット上の情報、テレビ番組、学校生活など、話に使えそうなものはメモしておくようにしました。また、内容をまとめていく時には、できるだけ肯定的な話になることを心がけ、子どもたちの反応を想像しながら修正を加えました。

2019年最初の「朝の広場」では、友達関係が上手くいっていないクラスの情報が入ってきたこともあり、急遽、仲の良い動物たちの写真を見せることにしました。通常なら、話の流れに変化をつけたいところですが、ここでは、子犬と子猿、子ウサギとひよこなど、違う動物同士の微笑ましい8枚のスライド写真を次々と見せて、子どもたちを笑顔にして、楽しい気持ちにすることを意識しました。受け手に実感がないと、せっかくのメッセージも半減してしまいます。話

【朝の広場(校長講話)】			
実施日			2018.11.15
背景			同窓会懇親会で「誠の鐘」が話題となった/引き取り手のない児童の落し物が多い
設定理由			学校のシンボルでもある「誠の鐘」の歴史から学ぶ
内容			同窓会って何? /「誠の鐘」の生きい立ちを写真とともに学ぶ
伝えたいこと			大切なものは名前をつける。持ち主の元に戻った「鐘」の気持ちを想像する
キーワード			同窓会、誠の鐘、歴史
スライドの内容			
朝の広場 20181115			
スライド No.	項目	映像の種類	備考
1	オープニング	写真	竹早祭写真 3カット
2, 3, 4	小学校の同窓会	文字	同窓会って何? (11月10日に本校にて開催)
5, 6, 7	アサヒロクイズ	文字	同窓会会員数 3 拝問題 答え:およそ8,200人
8	誠の鐘 1	写真	同窓会でのエントリー
9, 10, 11	歴代の誠の鐘	写真・文字	鐘は3種類ある。玄関脇にあるのは2代目
12	軍事供出	写真	戦時中の金属製品供出の写真
13	新聞記事	写真	鐘が返還された時の新聞記事 (H10年11月13日)
14	消防 半鐘	イラスト	供出されたものは火事で知らせる半鐘として使用
15	誠の鐘 2	写真	鐘のクローズアップ <大切なものは名前を>
16	同窓会懇親会	写真	同窓生や恩師との楽しい交流
17	創立120周年	文字	創立120周年 (2020年) のお知らせ

表1

の後半では、動物の子どもたちがたくさん出てきたことを気付かせ、「子どもには仲良くできる力があるみたいだね。この動物たちのように、クラスのみんなが仲良くして、楽しい時間を過ごすことを願っています」と結ぶことにしました。

「朝の広場」は、ランチルームのテーブルやイスを端に寄せて、全校児童が床に座って話を聞くため、発表者との

距離が近く、子どもたちの反応がよく伝わってきます。同窓会があった翌週の校長講話では、学校のシンボルである『誠の鐘』の歴史について話しました（表1）。

この半鐘は、戦時に軍事用の金属製品として供出されたままになっていたもので、平成10年に東京消防庁の倉庫で偶然見つかり、56年ぶりに返還されたのです。この話のメッセージは、「この鐘（写真1）は、学校名が刻まれていたからこそ、竹早に戻ってくることができたのです。ですから、大切なものは、しっかりと名前をつけましょう」としました。その頃、引き取り手のない児童の落とし物が多くなっていましたからです。



写真1 スライド15：鐘の胴体に刻まれた学校名が返還の決め手となった

同窓会の話から『誠の鐘』の歴史、そして「大切なものは名前をつけよう」、「クラスメートは一生の仲間」とつながっていく話の展開には、映像の助けが不可欠でしたが、メッセージをしっかりと伝えるためには、言葉と映像のバランスが大切です。そして、子どもたちには想像や考えるための間を用意することも必要だと思います。



教室で行われる授業はある程度、環境が一定しています。しかし、体育はグラウンドや体育館など様々な場所で授業を行い、さらに天候により左右されることもあり、授業環境は一定ではありません。その中で、生徒が落ち着いて受けられる授業を目指した取り組みの一例を紹介します。

1 ホワイトボードを活用した授業展開

体育の授業を行う環境は音がよく反響する体育館や、様々な音が聞こえるグラウンドなど、刺激が苦手な生徒には落ち着いて受けるには難しい環境です。そこで、始業前にホワイトボードに本時の学習内容と流れを示します。「本時のねらい」「本時の学習内容」「挨拶・体調確認」「体操」「練習」「ゲーム」などよく使用するものは、あらかじめマグネットなどで作成しておくと効率的です。この下準備こそ生徒が落ち着いて授業を受けられる下地になります。本時の授業の流れを把握し、自ら授業の目標を立てることができます。また、口頭での技術の説明は理解しにくいため、イラストや写真などの補足資料を掲示することにより生徒の理解を深めることができます。

2 体育ノートを活用する

生徒がホワイトボードを見て、本時の目標を立て、体育ノートに記載しています。自分で頑張りどころを考え、達成するためにはどうすれば良いかを自ら考え言語化することにより意欲的に取り組むことができます。さらに人と比べないため「できた」「できない」という評価ではなく、自ら立てた目標に対し、自己評価することにより何をどのように学ぶのかの思考を促進することができます。

3 「できない」ではなく「何ができるか」

体育が苦手な生徒の多くはスポーツが「できないから」「不得意だから」と言うことが多いです。ここでループリック評価を用いて評価を明確にさせることにより、生徒自ら目標を立てることができます。その目標に対する取り組みを評価することにより、「できない」「不得意」な生徒でも体育に意欲的に取り組むことが可能となります。

体育の授業は、天候や場所など様々な環境において行われる授業です。その中でも、生徒が落ち着いて、意欲的かつ積極的に深い学びを促進していく



授業にしていくためには、口頭だけで示すだけではなく、授業内容も生徒の自身の目標も可視化し、自己認識を高める必要があります。そうすることにより、生徒も教員も楽しい深い学びができるかもしれません。



自信がない子、表現することが苦手な子、「わかった」「できた」を実感しにくい子など、教室には様々な子がいます。その子たちを変えることができるのが授業です。どんな子も参加できて、満足できる授業があると、子どもたちは笑顔が多くなり、自信がつき、学校が楽しくなります。そのためには授業をどうデザインすればいいのでしょうか。



キーワードの1つは、「スモールステップ」です。全員参加の授業を目指した音楽の実践から見えた、音楽の授業における支援、特にリズムにおける手立てを紹介します。

○常時活動「リズム遊び」

音楽の授業の導入で行うリズム遊びです。教師が「♪♪♪♪♪」と手拍子したあとに、児童が「♪♪♪♪♪」と手拍子を真似る遊びです。リズムを少しずつ変えると、簡単だったリズムが難しくなっていき、その変化を児童は楽しみながら手拍子をします。慣れてきたら先生役を児童にしてもらいます。休符や八分音符を入れるなど、様々なリズムが出てきます。その工夫を教師が認めてほめることで、児童は自信ができます。また、友達のリズムを真似して手拍子ができることで、満足感を得ることができます。この活動を音楽の授業の導入に常に取り入れることで、全員が楽しめる遊びに変わっていきます。また、リズムよく手拍子をすることで楽しい雰囲気を作ることができます。

○小節ごとにリズムを確認

新しい曲に出会ったときは、1小節ごとにリズムを確認することで、既習の教材とつながりを持たせやすくなります。例えば、「小さな世界」の「♪せーかいは」と「ふじ山」の「♪あーたまを」ではリズムが同じです。短く区切ることで、前の学習を思い出し、自信をもって学ぶことができます。また、「リズム遊び」とも結びつきやすくなります。

○曲の速さをコントロール

その曲のリズムに合わせて手拍子をするときに、初めは速さを遅くします。少しずつ原曲に近づけることで、練習も重ねられ、リズム打ちができるようになっていきます。

○リズムをペアで教え合い

リズムを確認するときに、ペアで確認をすると、教え合う意識がうまれます。自分の右手を相手の左手の上にのせて手拍子をします。手拍子が相手とズレていないかを見つけやすくなるのです。すると、どう間違っているのか、教え合うことができます。

このようなスモールステップと段階的なレベルの引き上げが、わかりやすく、楽しい全員参加の授業にします。活動が制限される中ではありますが、児童が授業で楽しく学べるために、何ができるかを考えることが重要となっています。先生にとっても、楽しい授業をしていきたいですね。



中学校の音楽科教師として、30数年間勤めてきました。定年も間近になった一昨年のある日のこと、かつての教え子であるA君から、一通の手紙が届きました。私が新卒で採用され、初めて学級担任となり、持ち上がって卒業まで送った学年のひとりです。在学当時から、音楽的なセンスにはキラリと光るものがありました。心やさしい男の子でした。卒業後は音楽の道に進みたい、ピアノをもっとしっかりと習いたいという希望を聞き、私は、高校、大学時代に師事した恩師、H先生を紹介したのでした。

レッスンの様子を尋ねると、自分にとても合った教え方をしてくださる、本当にいい、とすこぶる満足している様子でした。彼はその後音大にすすみ、合唱に目ざめていきました。現在は合唱指揮者として活躍しています。

A君とはしばらく連絡はとっていませんでした。あらたまつた手紙に、胸騒ぎがしました。その予感は的中してしまいます。H先生が倒れられたというのです。伴奏をつとめる合唱団の練習に向かう途中だったのが不幸中の幸い。先生は一人暮らしです。これが家の中だったらと思うとぞっとします。救急車で運ばれて入院、手術。一命は取り留められました。

A君は仕事柄情報が入りやすかったとはいえ、一門の中でただ一人、いち早く先生のもとに駆けつけ、定期的にお見舞いに通っていたのでした。

先生は最初、どうして分かったのかと驚かれていた、心配をかけてはいけないからと他のお弟子さんには漏らさないよう堅く口止めされたそうです。退院後も週に一度お茶、食事を一緒するうち、ようやくお許しをいただき、こうして手紙をしたためたということだったのです。翌週から、私も会食に加わらせてもらいました。仕事の都合もあって、毎回とはいきませんが、A君は欠かすことありません。頭が下がります。

その後、私は年明けの3月に定年を迎えました。現在は、非常勤教員として、引き続き学校教育に携わっています。現在勤務している学校は、30年前、ちょうど昭和から平成の世になった年度から10年間勤めていました。A君に出会った初任校の次に赴任した学校です。

当時の中学生が、保護者世代になっています。私は、親子二代にわたって音楽を教えているのです。日々、教育の場に身を置くことに、厳肅な思いを新たにします。

H先生は、すっかり顔色も良くなり、声にも張りが戻ってきました。ご健康、ご長寿を祈りつつ、私も、もうひとがんばりを続けていきたいと思います。



H先生(右)を囲んで、A君(左)と私(奥)



小学生の時はいつも新聞係で、将来は新聞や本を作る仕事に就くのが夢でした。まさか教員になるとは思ってもいなかったので、大学でも教育課程は履修せず、卒業後は出版社の営業や書店店員、自分探しという名のアルバイト生活を経て、ようやく企業の広報誌などを制作する編集プロダクションに入社しました。編集者としてクライアントとデザイナーやライター、イラストレーターなどなど多くの方の力をつなぎ合わせて、一冊の冊子を仕上げるのはとても楽しく、やりがいのある仕事でした。

ところが、ある日、泊りがけで親子キャンプの取材に行ったときのこと。取材と言いつつ、子どもたちと遊びまくった夜、自分は子どもが好きなのだと感じました。先生になろうと決意してしまいました。その後、働きながら通信制大学で教員免許を取得し、今に至ります。

教員として大切にしているのは、「子どもたちのつながりを広げること」です。教員になるまで仕事を転々としたおかげで（？）、いろいろな方と出会いました。好きな人も、そうでない人もいたけれど、その人の“よさ”を知ればつながることができ、また仕事もうまくいくことを学びました。子どもたちには「みんな大好き！じゃなくていい。気の合わない人もいる。でも、せっかく一緒に生活していくのだから、お互いの“よさ”を見つけて認め合おう」と話しています。席替えは毎月しました。しかもくじ引き。隣とのペア活動やグループ活動はこれでもかというくらい取り入れて、つながりをつくりました。次の席替えの前には、隣の子の“よさ”を手紙で伝え合います。

また、“よさ”を発揮するチャンスも大切にしていました。お菓子作りが好きという男子の「お菓子教室」を開催し、みんなに作り方を教えてもらったことがありました。のちに、その子からの年賀状で製菓専門学校に入学したと知ったときは、彼が自分のよさを発揮する道に進んでいるのだなと、本当にうれしく思いました。

今年度から副校長となりましたので、これからは子どもだけでなく、職員の“よさ”が発揮できるようにしていきたいと思っています。



葛飾区立上小松小学校副校長

林正隆



Archive

2020.JAN ▶ 2020.DEC



2020年1月

STEM 教育

- ①STEM 教育とは何か?その現状と紹介
- ②日本に STEM 教育は必要か?日本の教育の現状と課題
- ③東京学芸大こども未来研究における STEM 教育プロジェクト
への挑戦

2月

2030 年以降の社会に必要な教育を考える

- ①OECD が提唱する、2030 年に向けた新たな学習観「ラーニング・コンパス(学びの羅針盤)」とは?
- ②新しい学習觀に基づく授業例とは?
- ③コンピテンシー育成のための研究授業をオンラインで!

3月

放課後の歴史・現在・未来

- ①放課後の歴史
- ②放課後の現在
- ③放課後の未来

4月

教育者のための創造的マインドを拓く

—異才発掘プロジェクト ROCKET を通して—

- ①AI 時代を生き抜く未来の教育
- ②教科書から学ばない学び、非常識を受け入れる学び
- ③軌道から外れる勇気が新たな道をつくる

5月

ユニバーサルの視点を大切にした体育授業

—さいたま市立常盤小学校での校内授業研究会から—

- ①「運動が苦手な児童や運動に意欲的ではない児童」について考
える
- ②ユニバーサルの視点を踏まえた体育授業
- ③校内研究から見えた展望

6月

出前授業を活用する

- ①「社会に開かれた教育課程」へのヒント
- ②「社長のなり方講座」で伝えたいメッセージ
- ③「社長のなり方講座」実施の舞台裏

7月

「宿題」を通じた学び

- ①宿題という概念
- ②宿題の目的
- ③これからの宿題

8月

新しい病原ウイルスと共生するための健康教育

- ▶①感染症とその予防 (4ページ掲載)
- ▶②学校における感染症対策の現状 (5ページ掲載)
- ▶③新型コロナウイルス感染が開く新しい社会の扉とメンタルヘル
スの課題 (6ページ掲載)

9月

ソーシャル・キャピタルと教育

- ①ソーシャル・キャピタルと教育1
- ②ソーシャル・キャピタルと教育2
- ③ソーシャル・キャピタルと教育3

10月

人とのつながりを大切にして、アフターコロナに備えよう

- ①人とのつながりを大切にして、アフターコロナに備えよう1
- ②人とのつながりを大切にして、アフターコロナに備えよう2
- ③人とのつながりを大切にして、アフターコロナに備えよう3

11月

CREDON FOR TEACHERS のこれまで

今を生きる子どもたち —VISION 200 回記念特集—

- ①教育の情報発信基地
- ②合唱界が混乱した 2020 年
- ③今、合唱活動を再考するヒント

12月

「学校から職場への移行期」の教育を考える

- ▶①日本のキャリア教育・欧米の職業教育 (7ページ掲載)
- ▶②アジア諸国と日本のキャリア・職業教育 (8ページ掲載)
- ▶③未来の大学のキャリア教育とは (9ページ掲載)



2020年1月	7月
子どもへの支援	学校における特別支援教育1
①感覚の過敏な子への支援 ②知的に境界域の子どもへの支援	►①高等学校におけるインクルーシブ教育 誰もが安心して受けられる授業を目指して (12ページ掲載) ►②小学校における特別支援教育 スモールステップがクラス全員参加の授業にする—音楽の授業実践から—(13ページ掲載)
2月	8月
プログラミングを自ら活用する小学生	絵本を用いた高校生への生活指導
①～小4「Safety Signal Makers」で見えてきたこと～ ②～プログラミング教育を「道具を委ねる」へ～	①SNSでのコミュニケーション ②自分がバリアあることに気づかせる
3月	9月
心理職の視点から特別支援教育の充実を図る	学校における特別支援教育2
①通常の学級と連携する～スクールカウンセラーの立場から～ ②学級担任としてのカウンセリングマインド	①中学校における特別支援教育 生徒のよさ・個性が活きる授業を目指して ②幼稚園における特別支援教育 一人一人のニーズをとらえて
4月	10月
小学校における生活指導	中学校における指導場面
①自分らしく社会で生きるための生活指導 ②子どもの自分探しを促す生活指導	①待つことと褒めること ②選択と集中
5月	11月
「言葉」から特別支援教育を考える	学習支援の立場からのアドバイス
①考えることが苦手な子どもには「答えを選べる」発問を ②学習言語：教科学習の理解や対人関係の構築を支える言語	①学習の困難を伴う子どもたちへの教材づくりのポイント ②通級指導教室と在籍学級の効果的な連携を図るために
6月	12月
朝の広場の時間	みんなで取り組む生活指導
►①子どもたちへのメッセージ ►②子どもたちへのメッセージ	①生活指導のポイント ②生活指導の実践例



2020年1月	7月
いつもヒントは目の前の子ども達に	漫画家から教員に
2月	8月
第87回 授業と子どもを考える会	思いはしなやかに
3月	9月
►H先生とA君	►“よさ”を大切にする (15ページ掲載)
4月	10月
日記と子どもの理解	脳みそリセット
5月	11月
脱“皮”学校の僕～Zoomによる授業研究会～	学級通信とともに
6月	12月
やりたいことをやってみる	教員の働き方改革とは何か ～シェアハウスの刺激、当たり前を疑う大切さ～

発行所 特定非営利活動法人 東京学芸大こども未来研究所
住所：〒184-8501 東京都小金井市貫井北町 4-1-1
電話：042-312-4112
編集 小田 直弥
デザイン 門馬 純

Copyright©2021by Tokyo Gakugei Univ.
Children Institute for the Future All rights reserved.

※本誌に記載されております所属および肩書き等については、
ウェブサイト掲載時のものです。
※本誌の内容を無断で複製・複写・放送・データ配信などを
することは、かたくお断りいたします。

<https://creduon.jp/>



おわりに

2020年、CREDUON FOR TEACHERS（以下CFT）に加えて、POWER FOR TEACHERS（以下PFT）が誕生したのは必然でした。未知なるウイルスと併走するため、全国の学校現場では感染防止策とICT機器の活用検討等が急務となり、誰もが「初めて」の連続に身を置かざるを得なくなりました。教職員が一丸となる他、若手教員の勇気で一步前へ進めた学校など、様々な「POWER（力）」の姿が日本中に溢れています。こうした力を、全国の先生方と共有できるサイトでありたいと、PFTは試行錯誤して参りました。

CFTならびにPFTは、掲載されているすべての情報が、教育現場を支える先生方の声であるという点で共通しています。実践紹介に留まらず、嬉しかったことや苦労したことなどの想いも凝縮されて、まさに全国の先生方のリアルと共に更新され続けるサイトです。

困ったときや悩んだとき、アイデアが欲しいときなど、気軽にサイトに遊びに来てください。サイトの中に息づく全国の先生方の経験が、ヒントになるかもしれません。そして、「こんな情報も欲しい」と思われたときは、遠慮なく弊所までお問い合わせください。このサイトは、全国の先生方のためのものです。ご利用いただけることこそ、私たちの一番の願いです。

NPO法人東京学芸大こども未来研究所 専門研究員

「POWER FOR TEACHERS」編集長
「CREDUON FOR TEACHERS」編集長

小田
直弥

CREDUON ANNUAL REPORT Vol.4

SEED
SWITCH ON CREATIVE MIND FOR EDUCATORS
CREDUON

Archive

2020.JUN ▶ 2020.DEC



- ▼ 2020 / 06 / 12 活動制限の中でも、子どもたちが創り、
学んでいく学校を。 (4ページ掲載)
- 2020 / 06 / 19 障害児教育の柱をいつも心に、対策を考える。
- 2020 / 06 / 26 教科の本質は外さずに、修学旅行も行う。
子どもをいつでも中心に。
- 2020 / 07 / 03 密を避けた新しい合唱部、そして避難訓練。
- 2020 / 07 / 10 新小学1年生とZoom授業。育休取得
では教育の基本を実感。
- 2020 / 07 / 17 新しい仕掛けから、新しいつながりを。
- 2020 / 07 / 24 動画編集は怖くない。基本の2ステップ
と自分に合った動画編集ソフトを押さえる。
- 2020 / 07 / 31 夏休みの宿題は効果的なものを。そして、
健康新しい仕掛けから、新しいつながりを。
- 2020 / 08 / 07 デンマークからのエール。いま、大切に
したいこと、見失ってはいけないこと。
- (8ページ掲載)
- ▼ 2020 / 08 / 14 不登校は連携で対応。フレップの事例(前
編)
- 2020 / 08 / 21 不登校を先生も抱え込まない。(後編)
- 2020 / 08 / 28 「GATA-KEN Online」その裏
側と想い(新潟大学附属新潟小学校)
- 2020 / 09 / 04 中堅研修での気づき。私らしい働き方。
- 2020 / 09 / 11 遊び、輝く子どもたち。
- 2020 / 09 / 18 「オンライン職業講話」を子どもたちに。
- ▼ 2020 / 10 / 09 「ICT×教育」に願いを込めて(前編)
- 2020 / 10 / 02 先生や子どもたちがクリエイティブになれる!教材づくりを助けるウェブアトリエ(後編)
- 2020 / 10 / 09 潜入レポート…福岡教育大学附属福岡小学校の充実した学習講座!!
- 2020 / 10 / 16 コロナ禍の中での学びを、学生の強みに。
見た目は変わつても、変わらないもの。今、学校は楽しいです。(12ページ掲載)
- 2020 / 10 / 23 潜入レポート…世界各国の先生と教育について考える場
- 2020 / 11 / 06 中国の先生、子ども、教育。そしてコロナ。
ピンチは4コマ漫画で笑い飛ばしていく!
- 2020 / 11 / 20 セルフマネージメントあつての私らしい教員ライフ。自分に素直に生きる。
- 2020 / 11 / 27 友達がいるから楽しい。今時の友達作りは入学前から。
- 2020 / 12 / 04 異校種間人事交流とコロナ対策。新しい気づきと試行錯誤を力に変える。
- 2020 / 12 / 11 G suiteも動画作りも、楽しむしかない!! "GEG Nara"でつながりましょう。(16ページ掲載)
- 2020 / 12 / 18 「年末振り返り編①」「新潟大学附属新潟小学校」と「アトリエふにぽ」
- 2020 / 12 / 25 「年末振り返り編②」デンマークからのエールをもう一度。

遊び心も大切に、楽しく運営をしていきたいと思います。

全国の先生方へのメッセージ

小田：最後に全国の先生方へメッセージをお願いします。

川島先生：奈良県で緊急事態宣言が出た時、奈良県の全先生向けの研修に呼んでいたことがあります。その時は「恥なんか捨ててしまえ！」という言葉を先生方に贈らせていただきました。この言葉には、自分で壁を作らないでほしいという想いを込めました。

私自身、恥なんか捨ててしまつて、誰に何を言われようとも、自分のやりたいことを楽しくどんどんやつていこうと心の中で思っています。「遊ぼうよ！楽しもうよ！」そんな気持ちでいます。

小田：今日の記事には書ききれなかつたのですが、印象に残つてることとして、教育委員会が契約してくれている様なツールをしっかりと活用して、働き方改革、特に生産性の高い働き方へいかにつなげていくか、という視点もとても魅力に思いました。そのためにも、批判を恐れずにお一人お一人の先生方のお取組が広く発信され、情報が活発に交換されることで、結果としてICT活用の活発化へとつながっていく、そのような流れが理想なのだと思います。

川島先生、本日はありがとうございました。

番外編

The screenshot shows the homepage of the Power for Teachers newspaper. At the top is a large, stylized logo 'ぱーぺーぱー'. Below it, the text 'POWER FOR TEACHERS NEWSPAPER' and 'SEP/25/2020 VOLUME.01'. To the right is a circular icon with a cartoon character's face. The main content area has several columns of text and images, including a large cartoon illustration of a teacher riding a rainbow. The text discusses the newspaper's birth and its mission to support teachers.

POWER FOR TEACHERS は、全国の先生方の想いを受け止め、発信するサイトとして、2020年5月に誕生しました。
「ぱーぺーぱー」は全国の先生より編集部へお寄せいただいた声をより気軽にご覧いただくために「学級通信」をイメージして作成し、POWER FOR TEACHERS の誕生秘話なども掲載しています。

POWER FOR
TEACHERS
プロジェクト始動!!
全ての先生の方のために

こちらのQRコードで
ご覧いただけます。

My name is Pico.



今は、対面授業に加えて、家で携帯電話を触っている時間を少しでもテスト勉強の時間にしてもらえるよう、端末を用いた学習機会を教員側から積極的に仕掛けていく「ハイブリッド型」を意識しています。

小田：今、G Suite の活用について教えていただきましたが、川島先生は「GEG Nara」の共同リーダーを務めていらっしゃること。恥ずかしながら、私はこの度初めて「GEG」の存在を知りました。恐縮ですが、こちらについても教えていただけますか。

川島先生：GEG というのは、Google 公認の地域コミュニティです。正式名称は「Google Educator Group」（Google 教育者グループ）といいます。Google のクラウドアプリを活用している教育関係者によって構成されているグループで、オンラインやオフラインの交流を通じて共に学び、Google のアプリケーションの基本的な使い方や教育的活用について共有するためのものです。

小田：この GEG は地域ごとにコミュニティが存在するようで、その奈良にあるグループの共同リーダーをお務めでいらっしゃるということですね。

川島先生：GEG Nara の直近の活動としては、Google の「認定教育者レベル1」という、Google のツールを授業で使いこなすための初步の資格取得を目的とした勉強会を、11月末にオンラインで開催したところです。その他 Slack というコミュニケーションツールや Google Group を用いて、メンバー同士の意見交流は常時行っています。

小田：ちなみに、GEG Nara のメンバーは現在、何名程度なのでしょうか。

また、参加できる方の条件等があれば教えてください。

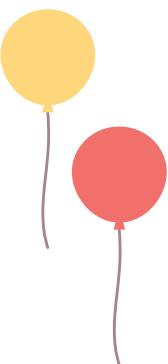
川島先生：グループは現在20～30名程度です。参加条件についてですが、基本的に奈良にゆかりがある方であれば、学校教育や社会教育を問わず、教育に関係する人のだれもが参加可能です。また、Google のアプリケーションの使い方を一から勉強してみたい方のみならず、すでに上級者の方も参加可能で。気軽に、地道にというスタンスで運営していますので、ぜひご関心がありの方はお問い合わせいただけだと嬉しいです。

小田：GEG Nara にご関心がある方は、HPへアクセスいただき、「GEG Nara への参加」から「GEG Nara の Google Group に参加する」をクリック、さらに「グループへの参加をリクエスト」をいただけと良いと思います。

もう1点、今後の GEG Nara のご活動について、すでに決まっているものはあるのでしょうか。

川島先生：今後は、いつ、何をするのかは未定なのですが、3カ月に1回程度、主催イベントを行う予定です。例えばですが、ICT を導入したらこんなことあるよねーといった「ICT 活用あるある」を、ラップバトルするようなイベントが良いのではないか、という意見がグループ内で挙がっていました。





小田：「オンライン授業のビデオってどうやって作るの（本編）」という動画を拝見し、その分かりやすさと、丁寧さにびっくりしました。思った以上に簡単に動画が作れることが、短い時間の動画にも関わらずぎゅっと詰まつていて、

さすがだと思いました。

動画作りにおいてはご関心も、スキルも秀でいらっしゃる川島先生でも、ご苦労された点はおありだったのでしょうか。

川島先生：人を前にするのではなく、カメラに対して話すことになるので、相手の空気感が読めないことは難点でした。

また、動画は面白くなければ2分以内に半分の子が離脱するもしくは早送りをし始めると教えてもらったことがあります。その意味では、動画は作ったけれども先生の自己満足で終わるというのは良くないので、いかに子どもたちを動画に引き留めておくのか、ということの工夫が課題と感じています。実際、私は5分の動画を分散させて、生徒に提供しています。「動画の尺、中身、どうしたら伝わるのか」という視点をもつことが動画を作る上で大切だと感じています。

小田：現在は対面授業が始まっている関係から、動画作りはされていないとのことですが、川島先生にお問合せいただくと、これまでにどのような動画をお作りにならされているのかについて教えていただけるとのことです。お問合せメールアドレスは、本記事最下部の川島先生のご紹介箇所に記載しています。川島先生、お心配りを本当にありがとうございます。

◆ 「GEG N a r a」の今後の活動にご注目！

小田：おそらく非公開資料になると思うのですが、この度の記事公開に当たり、

川島先生がご作成された「G suite for Education 活用の実際」という、59ページにわたる資料を拝見しました。（以下、資料の目次。）

この資料についても、ご関心がおありの方はぜひ川島先生へ直接お問い合わせいただきたいのですが、この記事をご覧の方のために、具体的に G suite の活用事例を1つ教えていただけますか。

川島先生：G suite は様々活用をしているのですが、例えば、これまで毎授業実施していた小テストをすべてオンラインに切り替え、その時にクラスルームを活用しています。具体的には、授業が終わる5分前に「みんな、携帯を出していいよ」と言い、フォームのアドレスを生徒に送ります。生徒は、送られてきたアドレスから小テストを回答するという流れです。こうした小テストを10回程度重ね、「小テストの初回から10回目までを期末テストの範囲にするから！」ということをしました。

小田：丸つけの手間を省くことができるのに加えて、紙から端末へ変わったことで、生徒は何度でも気軽に、繰り返し小テストに挑めるというメリットもありますね。

川島先生：小テストに繰り返し挑んだ生徒の痕跡は教員側で管理できるので、繰り返し学習としての小テストの価値が一層高まる感じています。

今日の流れ



- G suite for Education 導入の経緯
- Classroomの活用例
- フォームの活用例
- データ作成・共同編集の活用例
- 文字認識・音声認識
- 情報収集とコミュニティー

を生徒にも伝えるようにしています。

小田：川島先生のお勤めの学校は、普通科の高校におけるコロナの影響とは、また違った意味でご苦労があつたのではないかと拝察しております。

川島先生：やはり、私の学校では1年を通してものづくりをしているので、2か月の休校期間は大きかつたです。特に、ものづくりは「積み上げ」なので、取り組むことのできる時間が短くなつたことは痛手でした。これについては、実技の時間は短くとも作れる品物に変更しました。

小田：現在、日頃のコロナ対策についてはいかがでしょうか。

川島先生：特段変わつたことはしていないのですが、マスクと手洗いの徹底、そして毎日の検温（健康観察）をしています。あとは、少しでも体調に違和感があれば無理して学校に来なくとも良いことを生徒に伝えており、報告・連絡・相談の徹底をしています。

小田：感染拡大が再び言われている今だからこそ、基本的な感染対策を徹底したいですね。

◆動画作りのポイントは「尺、中身、どうしたら伝わるのか」を考えること。

小田：川島先生は、「川島企画」というアカウント名で YouTuber としても動画をアップされていると思います。限定公開と伺っていますが、ホームルームや授業動画も数多く YouTube を経由して、生徒に提供されていますと聞いています。この取り組みの背景について教えていただけますか。

川島先生：奈良県では4月、「在宅教育」という名称を日本で先陣を切つて掲げて、オンラインを前提にした授業実施に取り組むことになりました。学校としても緊急事態宣言発出後は、できる人からオンライン授業を実施するようになり、たことや、5月からは県内すべての国公立学校に Google Classroom，以下「G suite」）アカウントが発行されたことを皮切りに、クラスルームを作成し、活用を開始しました。こうして、「在宅教育」という名のもと、生徒の学びを途絶えさせないこと、家にいても勉強ができる取り組みを開始しました。

小田：その一環として、YouTube の活用があつたということですね。

川島先生：当初、奈良県は YouTube に授業動画をあげることを推奨していました。教員も自宅勤務となり、動画作成のスキルをあげることが求められ、可能な人は実際に動画をアップすることも言われていました。私自身、もとは「番組を作つてみたい！」と思っていたので、「これは、腕の見せ所や！」と思ひ、取り組みました。



G Suiteも動画作りも、楽しむしかない!!
“GEG Nara”でつながりましょう。

GEG Nara共同リーダー。現役高校教諭

川島 賢太 先生



GEG Naraの共同リーダーであり、

奈良県で現役高校教諭をされている川島賢太先生へのインタビュー。

・動画作りのポイントは「尺、中身、どうしたら伝わるのか」を考えること。

・対面授業に加えて、自宅での端末を用いた学習機会を積極的に提供。

・ICT活用にあたって、自分で壁を作らないでほしい。

◆ケーブルテレビ勤めから教員へ。

小田：今日はGEG Nara（GEG = Google Educator Groups）の共同リーダーであり、奈良県で現役高校教諭をされている川島先生にお話を伺つてまいります。はじめに、川島先生のお勤め先の学校について教えてください。

川島先生：私は、奈良県にある高校の機械工学科で教員をしています。ここでは、高校生に機械を使ったものづくりを指導しています。特に私は生徒たち向けて、「機械屋の中の電気屋」であると称して独自色を出しながら、機械工学に留まらず、電子工学や情報工学（電子工作からプログラミングまで）等を活用して動く機械をつくること（メカトロニクス）を専門に教えています。

小田：川島先生は大学を卒業後、教員になる前に社会人経験がおありとのこと。

川島先生：大学卒業後は、ケーブルテレビに2年ほど勤めました。それは「テレビ番組を作りたい！」という夢があつたからです。ただ会社からは、「君は情報に強そうだからインターネットの部門に入つてください」ということで、勤務期間中はネットワークエンジニアをしていました。その間、教員になる夢もあきらめていなかつたのと、マイナーな工業科の教員の公募もたまたま出ていたことから、ご縁あって現職に至りました。

小田：工業科の生徒には、卒業後、就職を選ぶ子も多いと思いますが、まさに社会で求められる力を実感したうえで、先生になられたのですね。

川島先生：そうですね。私の強みとしては、わずか2年ではありましたが出で企業での経験があることです。そのため会社の仕組みや、会社で求められる力

ください。

今、コロナだけでなくギガスクール構想も相まって、子どもたちを取り巻く教育環境に様々な変化が訪れました。保護者の目線から、子どもたちの今について、お感じになられていることなどありますでしょうか。

しません。

Mさんの父：一番面白かったことは、タブレットなどの機器に対する子ども

の順応力です。学校が休校になったタイミングで、密になるという理由で娘が通う塾もお休みになりました。その頃、並行してタブレットを使用した通信教育教材も始めましたが、小さい頃からゲームなどでそういった機器に馴染みがあるためか、紙の問題集を使うよりも面白がつて自ら進んで勉強に取り組む姿を見ることができました。今の子どもはそのような新しい技術に馴染む事であります。Mさんは、このままではそのままでは、Mさんは、このままでは、

例え、昔は良いコーチに出会えるかどうかが勉強に限らず、何事において

も運命の分かれ道でしたが、今はYouTubeやSNSなどで世界中の有名な人に簡単にアクセスできます。それこそ小学1年生の子でもプロ野球選手の練習方法をマネすることができる時代になっています。今後、これらICTの活用によって、学校で先生から直接学ぶのに並行して、学校以外での教育機会が増え、教育の質も総合的に上がっていくのではないかなど感じているので、もつと力を入れて進めていただけるといいのかなと思っています。

◆全国の先生方へのメッセージ

小田：最後に、全国の先生方へ一言メッセージをお願いします。

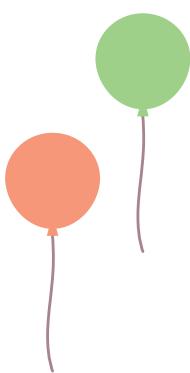
Mさんの父：休校期間中を振り返ると、こちらが思っている以上に先生方が子ども一人ひとりのことをよく見て、それに対し、適切なメッセージやアドバイスを発信してくれていました。先生のすごさを、子どもを持つ親にとってとても実感しました。

Mさんの母：先生方は子どものことをよく見てくださっているので、とても安心して子どもを預けることができています。とても感謝しています。

Mさん：私の先生は、生徒のことを一番に見ててくれるので、それがとても嬉しいです。コロナに負けずに頑張ってください！

小田：皆さん、今日はありがとうございました。

Mさんの母：コロナによる休校期間中は子どもがずっと家にいることになり、今後の学校生活などに対する不安がありました。学校の先生方が丁寧にフォローしてくださっているので、乗り越えていくことができている印象をもっています。特に、休校中、何回も連絡網を通じた連絡をもらったりして、子どもも不安だったろうけど、先生方のおかげで安心して過ごすことができたのかも



ニールの仕切りが吊るされていて、飛沫対策がされていました。修学旅行については、私は2年生なので聞いた話ですが、例年と異なり宿泊は無しになり、一日目は日帰りで広島、もう一日は日帰りで岡山に行つたそうです。

小田：ということは、学校に集合してから瀬戸大橋を通つて広島に行き、その日のうちに帰つてきて、明くる日にまた学校に集合してから瀬戸大橋を渡つて岡山に行き、その日のうちに帰つてきたということですか！？驚きが隠せません。

部活動の状況はいかがですか。

Mさん：今はもう、ほとんどの部活動がいつも通りに活動できている状況です。私はソフトボール部に入つていて、屋外で行うソフトボール部に限らず、屋内での卓球部も、吹奏楽部なども活動は再開できています。

ソフトボール部では新人戦を終え、今は県大会に向けて練習に励んでいます。ただ、大会では応援について制限がかかっていて、拍手や「がんばれーー！」などの一言程度なら声を出してもいいのですが、応援歌などは禁止になっています。

◆これまでと、今と、これから。

小田：率直に、今、学校は楽しいですか。

Mさん：うーん…。楽しいです。

小田：少し考えている様子でしたが、どんなことを考えていたんですか。

Mさん：「前と変わることって何かあるかな？」と考えていました。マスク

を着けたり、手洗い・うがいをこまめにしたりなど、見た目は少し変わったけど、授業も普通に受けることができるので、それほど変わっている感じはありません。

小田：本質的には変わらないということですね。学校生活では特に何が楽しいですか。

Mさん：部活です。1年生の時は先輩の指示に従つて自分のことだけをやつていればよかつたのですが、今はキャプテンを務めているので、個性の強いみんなをまとめていかなければなりません。大変な役割ですが、それでも部活はとても楽しいです。

小田：将来の夢はありますか。

Mさん：まだ具体的にはありません。ただ、2年生になつて進路学習の時間がが多くなり、その中で感じていることは「人のためになる仕事がしたい」ということです。まだ漠然としていますが、医療関係や貧困支援などに興味があります。

◆これまでと、今と、これから。

小田：具体的になりたい職業が見えてくるのはもつと先でも良いかもしませんが、いま興味があると感じているものへの感覚は宝物ですから、大切にしてほしいです。これからも自分の可能性を信じて頑張ってくださいね。心から応援しています。

◆両親から見たコロナ禍の教育。

小田：せつかくなのでMさんのお父さん・お母さんにもお話を伺いさせて

Mさん：いつもだったら夏休みで出るような宿題のことです（笑）習字や作文、読書感想文、ポスターなどの課題のほか、授業の予習も宿題として出ていました。休みが長かったおかげでやりきりましたが、結構大変でした。

小田：コロナで突然発生した休みについて、正直、どう思つた？

ものです。その意味では、みんなの想いが詰まつた御飯になりました。

学校での新しい日常。

小田：さて、少し視点を変えて、今の学校でのコロナ対策について教えていただけますか。

Mさん：最初は「休めてラッキー」くらいに思っていました。ただ、宿題はもちろん予習なども全部自分でやらないといけなかつたのと、ずっと家にいるのもちよつとずつ暇に感じてきていたので、最後の方は早く学校に行きたかったです。

◆夏休みは料理。おいしくできました。

Mさん：1学期が終わって、夏休みは夏休みで新しい宿題が出たのですが、家庭科の宿題では料理を作りました。春雨ときゅうりの酢の物、ピーマンのナムル、お味噌汁、チーズや梅としそを挟んだチキンカツなどです。



Mさん：私は保健委員をしているので、答えられそうです。まず毎朝、自宅で検温をしてから登校するのですが、検温を忘れてしまった生徒は学校で検温します。自転車通学の生徒は、駐輪場に入つたらすぐにマスクを着けるようにして、そのあと、もちろん授業中も着けたままで。体育の時だけは基本的にマスクを外しています。

音楽や理科など教室移動がある場合と給食の時は、その前後に手洗い・うがいをしています。

授業中は、生徒と先生は向かい合うので、教卓にアクリル製の板が置かれていて、先生はマウスシールドを着けて授業をしています。生徒の方は、音楽の授業の時だけ、各自の机に囲いが置かれています。

友達との会話については、密にならないようにとは言われていますが、会話を自体を控えるようにとまでは言いません。あとは、今まで行っていた全体会はなく、各教室でモニター越しに行うスタイルに変わっています。

小田：かなりいろいろな対策がなされているのですね。学校行事にもコロナの影響は出ていますか。

Mさんの母：しそは庭でとれたもので、ピーマンやキヤベツ、きゅうり、わかめはおばあちゃんが畑で作っていたり、海でとれたものを干して送ってくれた

Mさん：音楽祭と体育祭は中止になってしまいました。でも、2年生の校外学習や3年生の修学旅行はありました。私たち2年生は校外学習で徳島の大塚美術館や徳島動物園に行きました。移動はバスでしたが、前の席のところにビ

見た目は変わつても、変わらないもの。

今、学校は楽しいです。

香川県在住の中学2年生

Mさん

現役中学2年生（香川県）とその保護者へのインタビュー。



10月23日(金)

話し手…Mさんとその両親
聞き手…小田直弥

私の先生は生徒のことを一番に見てくれてるので、
それがとても嬉しいです。
コロナに負けずに頑張ってください!!

◆やつぱり、学校に行きたい。

小田：コロナが学校現場への直接の影響をもたらし始めてから半年以上が経ちました。このコーナーでは全国の先生方や教育関係者へのインタビューを通して、その時々の「今」を常に伺い続けてきましたが、さらに私がずっとお話ししてみたかったのは、子ども自身です。

そこで今回は、香川県にお住いのMさん（中学2年生）とそのご両親にお話しをお伺いしていきます。

Mさん：緊張しています。よろしくお願いします。

小田：早速ですが、今回のコロナでは初めてのことがたくさんあつたと思います。4月頃からの学校の様子を振り返りながら、教えてもらえますか。

Mさん：4月の最初の方は、本当にちょっとだけ分散登校という形で学校に行きましたが、すぐにお休みになってしましました。5月の中旬あたりから午前授業のみの分散登校になつて、その後、学年ごとに日にちを分けて登校しました。5月末には、全員揃つていつもどおり午後の授業も始まりました。ただ、給食だけは全学年一緒にランチルームで食べるのではなく、3年生だけがランチルーム、1、2年生は教室で、全員前を向いて食べることになりました。今もこの給食のスタイルは続いています。

小田：自粛期間中の宿題はどんなものがあつたか覚えてていますか。

Mさん：結構でかいものがありました。

小田：「でかい」というのは（笑）

小田：休むということを命令してもらうくらい強い表現でなければ働いてしまうというのはよく分かります…。

海老原先生：「たくさん働くのが良いことだ」という意識がまだ日本には残っているように思います。そうではなく、「休むことが良い仕事につながる」というのは明確だと私は感じています。先生方によつては休暇の期間も異なると思いますが、その間は学校から離れ、全く関係ないことを考える等、しっかりと休んでほしいです。そうでないと、冬休みまでの間に息切れすると思います。

小田：子どもたちもしっかり休ませたいですね。

海老原先生：終えられなかつた単元のことを考へるというような自先のことよりも、勉強したい、学校に行きたいというような気持ちを子どもが持ち続けられるように、という長期的な目で見ないと、大きな代償を払うことになると感じています。この夏休みは、教員自身がしっかりと休むこと、そして子どもたちをちゃんと休ませること、これがとても重要だと思います。今回のコロナは誰もが初めて直面している問題です。「今まで通りできるわけがない」ということを改めて考へてほしいです。

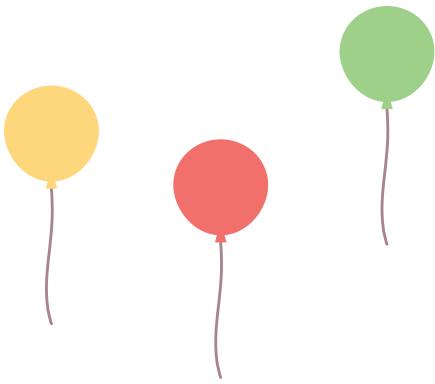
◆全国の先生方へのメッセージ

小田：とても短い時間だつたこともあり、お話し足りないところもあるかと思いますが、個人的にはデンマークで教員をされているからこそお持ちの視点を共有いただけたことに、改めて感謝しているところです。最後になりますが、日本の先生方へメッセージをお願いします。

海老原先生：「休むというのが良い仕事につながる」ということはデンマー

ク人を見ていてとてもよく思うことです。私たちは教員であるより前に人間で、休むということは人間にとつてとても大切なことです。常に120%で働くのではなく、70%くらいで良しと思えるように肩の力を抜いてほしいです。また、20年以上教員をやつているような私たちの年代は、上手な働き方、休み方のお手本を若手の先生に見せていくべきだと思います。若手の先生が上手に休めないのであれば、それは私たちの年代の責任だとも思います。

小田：海老原先生、大変お忙しい最中、インタビューにお力添えをいただきありがとうございました。



◆安全・安心でいられてこそ勉強ができる

小田：海老原先生のnote「With Coronaな学校生活」（5月15日）では、「保健省からのアドバイス」として「1. 手を洗うか消毒をする。2. 手ではなく、腕に咳やくしゃみをする。3. 握手、ハグ、顎を合わせるハグを避ける。4. 家でも職場でも掃除に注意する。5. 高齢者やコロナが重症化する恐れのある慢性疾患がある人は、人混みを避ける」ということが挙げられています。この記事に対する具体的な学校での対応をまとめていらっしゃいます。この記事が公開されてより2ヶ月以上が経ちましたが、学校での対応に変化はあったのでしょうか。

海老原先生：例えば、子ども同士の距離が2mから1mになつたり、また最初は少人数の固定のメンバーだけで遊んだり、食事をしたり、グルーピングをしています。逆にこの2ヶ月間変わつていない点としては、基本的には外での活動が推奨されていることです。

小田：緩和されたとはいえ活動制限が継続されている中、どのようなことを大切に教育活動に取り組まれているのでしょうか。

海老原先生：活動制限が子どもたちのストレスになりすぎないということを大切にしています。感染症対策をすることはもちろん大切なですが、それによって学校に行くことがしんどくなつてはいけないと感じています。また、手を洗うことや消毒をすること、保護者の方はお子さんに少しでもコロナらしさ症状があれば学校には送らない等の連携を通して「『安全』を確保して、子どもたちが『安心』して勉強できること」が大切だと感じています。子どもたちの安全・安心のために教員はいつも通り学校にいますし、子どもが悲しんでいると

きにはハグもします。子どもたちが安全・安心でいられてこそ勉強ができるのだと思います。

小田：今言われているリスク対策（3密回避、手指消毒、マスク着用等）は子どもたちの身体を守るものですが、これを安全・安心という「心を守るため」の視点で見たとき、教員自身が感染リスクになることを考えつつも、時には子どもと近い距離でコミュニケーションをとるなど、過度に怖れないよう柔軟に捉えていきたいです。

海老原先生：具体的な授業場面の工夫をお伝えすると、例えば算数をしているときに、算数のブロックを子どもたち同士で共有させないとか、洗えるものを使う他、ボードゲームをするときには子どもの間に教員が入ることで自然に子ども間の距離が確保できるという、小さな配慮でできることはたくさんあります。こうした視点をもつことで、私たち教員ができる感染症対策をみつけるのも上手になつてきました。そうした結果、子どもたちに安心が提供されていくと考えています。

◆しっかり休むこと。「今まで通り」を捨てて。

小田：この記事が公開される8月7日は、日本のほとんどの学校が夏休みに入っていると思います。日本よりも早く夏休みをお過ごしなられているデンマークの海老原先生から見て、今まさに夏休みが始まつた日本の先生方へ、夏休みの過ごし方にに関するアドバイスはありますでしょうか。

海老原先生：「節目なので、きちんと休むこと」、これに尽きます。そのためには、管理職がしっかりと職員を休ませることが大切だと感じています。

目標に対しても、どのような教材を選びアプローチをしていくか、これを考えるのがデンマークでの教員の力になります。そのため、デンマークの教員は「目標にどのように到達するか」という授業の組み立て方が得意だと感じています。教員はクリエイティブな仕事だ』と日本でも思っていましたが、デンマークでは一層強く感じています。

小田：非常に興味深いです。

海老原先生：もう1つは、教員一人一人の裁量が大きいので、様々なことにチャレンジしやすかつたり、「やってみよう！」と思える土壌があります。私が少し変わったアイデアをもつていたとしても「やってみよう」という職場の雰囲気があるのはとても良いと感じています。

小田：視点を日本に移すと、今、まさに日本の先生方もクリエイティブな毎日を過ごされていると感じています。それを加速させている要因の1つに、「明日学校が休校になるかもしれない」という危機感のようなものもあるとれます。クリエイティブでなければ乗り越えづらいのが今であるとも言えるかもしれません。先生方の独創的なアイデアを今まで以上に尊重し、大切にすることが、今を乗り切るためのヒントになり得ると感じました。

◆プロの視点を取り入れたコロナ対策を。

小田：日本とデンマークではパンデミックの時期がずれていたこともあります。また、国が学校再開をすると宣言してから、実際に学校再開がなされるまでの期間も短かつたと思いますが、その間、先生方は緊急のディスカッション等を行ったのでしょうか。

海老原先生：結論から言うと、ディスカッションはありませんでした。デンマークでは、様々なことに対しても保健省がガイドラインを出しています。私個人の「note」でも紹介しましたが、例えば「子ども同士が遊ぶ時」についてもガイドラインが出されました（現在は異なるガイドライン）。学校再開に際しては、まず保健省が学校再開におけるガイドラインを出し、各市の議会委員がディスカッションをして学校におろし、学校では各自の実情に合わせて多少のアレンジを行うという流れでした。ただ、各学校でのアレンジというのも、私たち現場の教員が行うのではなく、それは管理職の仕事でした。例えば「朝来た時、11時、食事の前、食事の後、14時、帰る前に手を洗ってください」ということを管理職が決めてくれるので、現場としてはその検討に労力を割く必要はありません。机間の距離を2mにするのか3mにするのか、ということを考えるのも現場の教員の仕事ではありません。その意味で、学校再開に際してのディスカッションはありませんでした。

小田：国から始まり現場の先生まで、それぞれのセクションが迅速に自身の役割を果たし、滑らかなバトンパスをしあった様子が想像できます。

海老原先生：例えディスカッションを行う場合でも、何についてディスカッションすべきなのか、それは誰がディスカッションすべきなのか、という視点が大切だと感じています。その線引きがはつきりしていないと、例えば今回のコロナ対策においては、変な解釈で間違った安全対策を行ってしまうことにながりかねません。

「コロナ安全管理」は私たち教員のプロフェッショナルではないと考えています。言い方を変えると、コロナ安全管理について教員よりも深く理解しているプロは他にいるわけです。安全管理のプロが考えたことを、私たち教員が現場に合うようにする、それが今は大切なのだと思います。

いま、大切にしたいこと、見失つてはいけないこと。

ピーダーセン 海老原さやか先生



デンマークの特別支援学校にてお勤めのピーダーセン 海老原さやか先生へのインタビュー。

- ・コロナ安全管理についてはプロの考え方を現場に取り入れる。
- ・休むことで仕事の質を向上させる。
- ・ベテランの先生が上手な働き方、休み方のお手本を見せていく。

◆デンマークにおける教員の力。

小田：今日は国を超えて、デンマークの特別支援学校にて教員をされているピーダーセン 海老原さやか先生にお話を伺つてまいります。デンマークにおけるコロナ対策は、世界でも注目を集めており、広い視野で見たときに日本の先生方にもヒントとなることがあると感じています。

早速ですが、海老原先生はデンマークにご活動の拠点を移されて、どのくらい経つのでしょうか。

海老原先生：2004年の留学の後、2006年の春に結婚を機にデンマークに移ったため、15年が経ちました。デンマークに来る前は、5年間、都内の養護学校で教員をしていました。その時は、英語を教えていました。

小田：デンマークでは、いつ教員になられたのでしょうか。

海老原先生：2011年から特別支援クラスのヘルパーとして関わり始めました。というのも、デンマークでは日本の教員資格が使えなかつたからです。その後、職場のリーダーと相談の上、2012年の夏から2年間、週1回は資格取得のための教員養成学校に通い、週に4回ヘルパーの仕事を続けるという生活をしました。正式な教員資格取得ができたのは2014年6月だったので、ヘルパーとして働いていた学校で欠員が出たため、運よく、2014年2月から教員として正式に働き始めました。

小田：日本とデンマークの両方で教員経験がおありとのこと。おそらく同じ「教員」という仕事であったとしても、その質にはギャップがあつたと思うのですが。海老原先生：デンマークの学校はカリキュラム制ではないので、決まった到達

小田：先生の学校では特別活動の実施についてはどのようにご判断ですか。

U先生：クラブ活動については、4～6年生と少し人数が多くなってしまうので、1学期はやらない方向です。委員会活動については5、6年生が取り組んでいて、人数も分散されるので6月から実施していく予定です。「子どもが学校を創っていく」ということを目指すためには委員会活動は重要なではないか、と特活の主任とも話しをしました。

小田：学校の目指すヴィジョンと教育活動に一体感があり、「子どもが主役である学校」という柱をしっかりと感じます。

U先生：「子どもたちが学校を創っていく」「子どもたちが学んでいく学校を目指していく」という管理職の指向性がはつきりしているので、学校全体としてもこういう活動を大事にしていこうという想いがあります。

◆教育活動をさらに安定させるために

小田：現在のお困りごとや、懸念等はありますか？もしかすると、この記事を見てくださっている企業の方や大学の先生等がなんとかしてくれるかもしれません。

U先生：オンライン実施の環境を整えてあげたいとは思いますが、今後、また分散登校にしなければいけない等の事態になつたときに、学校の先生たちは忙しいんですけども、子どもたちは学校に滞在する時間が短くなってしまいます。そうなると、家で学習をせざるを得ない環境になるとと思うので、例えば一人一人にパソコンがある状況ですとか、プリンターがあると助かります。

小田：プリンターがあると、活動の幅は確かに広がりますね。

U先生：あとは、もしかすると既に実現している学校もあるのかもしれません。が、集会や行事などの実施が難しい場合を考えると、体育館等の広い場所で実施している取り組みを各学級や専科教室などでリアルタイムで観られるようなシステムがあると、蜜を避けて行える活動が増えるかも知れないと感じています。

小田：その他にも、先生ご自身が授業実施を検討する上であると助かるものも思ひ当たりますか？

U先生：指針が欲しいです。授業時数を優先するよりも、学習内容をきちんとやればいいというのはあると思うのですが、ただどの活動内容を割愛しても良いのかは判断が難しいです。学校ごとに決めていいものなのか、不安に思う先生方もいらっしゃる印象をもっています。

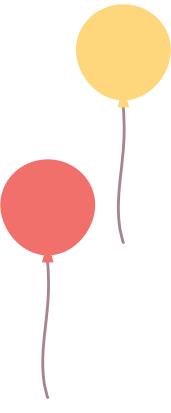
◆全国の先生方へのメッセージ

小田：最後に、全国の先生方へメッセージがあればいただきたいのですが、よろしいでしょうか。

U先生：子どものことを第一に考えて、それから先生自身も余裕をもつていろいろなことに取り組んでほしい。職員にしても、各家庭の保護者の方にしてもご協力いただいていることがありがたいので、みんなで乗り切りましょう。

小田：U先生、お忙しい最中にインタビューにお時間をいただき、本当にありがとうございました。





来られた先生だけでなく、育休代替の先生も多いので、学年でしっかりと情報共有をしていく時間を作るようとしています。

小田：とても効率的で、危機管理にもつながっていく重要な取り組みだと感じます。

U先生：今、一コマを30分に凝縮した授業をやっているのですが、1回の授業の進度にズレがあると後々厳しいことになるので、学年間で授業の計画や流れを確認して、若い先生でも授業ができるように教員同士が教えあうような研修システムが出来ています。今は分散登校のために同じ授業を2回ずつ行うので、若い先生たちも研修をしながら日々を過ごしています。

小田：教員同士が教えあう。理想的な職員室に思えます。

U先生：正規の職員だと初任研等があるところ、講師の先生だとそういうのがないですよね。そこで、具体的には今は2回授業があるうちの、1回目のT1を専科の先生、T2を講師の先生が担当して、2回目は役割を交代、授業後は専科の先生が講師の先生にアドバイスをする、というようなことを自主的に先生方が取り組んでいます。

◆活動制限の中でも大切にしていきたいこと

小田：これまでの子どもたちの学びのスタイルを思うと、「密の中での学び」みたいなものもあったのではないかと個人的には感じています。お友達と寄り添いあっておしゃべりしたり、共同作業をしたり。その中で子どもたちが集団と共に生きる力を育んでいたようにも思います。いま、この状況なので、このような学びも制限していくべきなのか、悩ましいところです。

U先生：教育長から「子どもたちの笑顔を大切にしてほしい」というようなメッセージがあつたんですね。今、行事の実施も検討しているところで、学校という場はソーシャルディスタンスを常に保つというのは難しいところもあるのですが、換気の徹底や長時間の実施を避けるというところで、できるかぎり実施をしていきたいとは個人的にも、学校全体としても考えているところです。各教科での取り組みについて検討を進めることもそうですが、子どもたちの学びの保証をしつつも、学校としてはどこに一線をもつかということを、管理職も含めて学校全体で理解したうえで子どもたちに活動させていこうとは思っています。

と聞いていました。「つながりをもつていこう」ということを地区全体として大切にしていたことがこの背景にはあります。

小田：ご苦労が多かったと拝察していますが、保護者の方への安心にもつながる取り組みだったと感じます。子どもたちは、U先生と直接電話ができる、嬉しい様子でしたか。

U先生：私は3年生の担任で、学級替えをしてすぐに休校になつたので、緊張していたというのが1回目の印象です。電話の受け答えも最初はおぼつかない様子で、少しずつ慣れていったという感じですかね。

小田：電話でのつながりによって、担任の先生と子どもたちが会えなかつた期間の「穴」のようなものを埋められていたのかどうか、個人的にはそのあたりも気になるところです。

U先生：子どもたちの中で「担任の先生がこの人だ」という認識にはつながつていったと感じています。あとはこの前、分散登校の時ではあつたのですが教育委員会の方が学校にいらしたとき、「子どもたちが明るく学校生活の中に入り込んでいる」ということをご指摘くださいました。そういう意味では、新しい担任で緊張はしているんだけれども、つながっていたからこそ（子どもたち自身が）固くはなかつたんだやないかと思います。

◆再開して感じた保護者の方の協力、教員同士の新しい連携

U先生：学校が再開した今、保護者の方のご協力はとても大きかったと感じています。教員としては、子どもたちがずっと家にいたことで「集団行動として気を付けるべきこと」が身についているのか心配していたのですが、僕らが教

える前から子どもたちが意識していると感じたので、各家庭の中であらかじめ伝えてくださつていたのだと思いました。

小田：家庭と協働した教育というのは、かねてより大切なキーワードとして言われているかと思いますが、その点で、何か休校以前との違いはあつたりするのでしょうか。

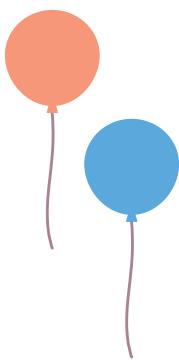
U先生：保護者の方の意識の変化というのはあるかもしません。日頃、子どもたちは学校で6時間の学習をしていたわけですが、家の中で6時間集中して学習することはなかなか難しいと思います。「学校でそれだけ長い時間勉強できるのって一緒に学ぶ友達がいるからなんだ」と、おっしゃつてくださる保護者の方もいました。

小田：とても共感します。各家庭との連携の他、学校内での教員同士の連携という視点についても、何か以前と比べて変化があつたのでしょうか。

U先生：今の分散登校だと担任の先生が子どもたちを見る時間が多くなるので、例えば専科の先生に、昇降口が密にならないように声掛けをしてもらうとか、分散登校の対象児童ではない子どもたちを受け入れる教室の見守りをしてもらったりとか、消毒作業をしてもらったりとか、教員一人ひとりの役割分担を意識するようになりました。

小田：新しい連携こそ、今の状況を乗り越える工夫ということですね。

U先生：勤務校では給食はまだ始まってないんですけども、午前中に授業を全て詰め込んで、午後は先生方の会議をするようにしているんですね。新しく



東京都内の小学校で3年生の担任をされているベテラン先生（U先生）へのインタビュー。

・学校再開後、先生同士が主体的に教えあう取り組みが始まった。

・活動制限についてを「普段の生活場面」と「学びの場面」とに分けて考えることで、学校の楽しさや学びの質を保証していく。
・教員仲間や保護者の方へのご協力へ感謝の想い。



◆週1回の電話が埋めてくれたもの

小田：「POWER FOR TEACHERS」のこのインタビュー企画、1人目として、U先生をご紹介させていただけること、大変うれしく思っています。お引き受けをいただき、本当にありがとうございます。はじめに、今回コロナによる学校休校というのは、前代未聞のことだったと思いますが、休校判断に伴い、頭によぎったことを教えてもらえますか。

U先生：まずどれくらい続くのかが分からなかつたので、学校再開後、時数を大切にするのか、内容を大切にするのか。それから、どうしても活動に制限が出てくるので、制限することが望まれる活動については実施をしなくても良いのか、それとも時期をずらしても実施できるように計画を立て直す必要があるのか。それらをどのように判断していくのかが分からず、不安でした。

小田：休校中の他校での取り組みについて、情報収集はされていたのでしょうか。

U先生：副校长が他の学校の状況を聞いてくれたり、指導室の先生が問い合わせてくれたりとか。私も他の学校の教務主任に「いま、どんな状況？」と聞いたり、Zoomを使って別地区の様子を聞いたりはしていました。

小田：休校中の子どもたちとのやりとりについてはどうでしたか。

U先生：私の地区だとオンラインの環境が整つていなかつたので、週に1回、家庭に電話をするということをやつっていました。その時にまず、保護者の方にお子さんの様子やご家庭で心配に思っていることがないか伺つたりして、その後子どもに代わつてもら、「元気にしてるのかな?」「心配なことはない?」

その想い、つながる。

POWER FOR TEACHERS

「POWER FOR TEACHERS」について

「POWER FOR TEACHERS」(<https://power.creduon.jp/>) は、コロナ禍における教育活動について、全国の先生方のお役に立てる情報を発信すべく、2020年5月よりスタートしました。

「POWER FOR TEACHERS」では、現在4つの“ROLE”を設け、それぞれの角度から情報等の発信を行っています。

1st ROLE

コミュニティをつなぐ

全国の先生が集い、意見交流をしているコミュニティを紹介

2nd ROLE

資料をつなぐ

全国の先生もしくは学校等が作成した資料を紹介

3rd ROLE

スクールデイズチャレンジ

先生のみならず、社会全体で教育活動を支えていくことを目的としたSNS企画



4th ROLE

声をつなぐ

全国の先生の取り組みや想いを伺ったインタビュー記事を紹介

はじめに

新型コロナウイルス感染症の全国的拡大の影響により、我々の生活は大きく変化しました。教育現場もまた例外ではありません。2020年5月にコロナ禍でも先生方に元気になっていただきたいという想いから、実用的かつお役にたてる情報が満載の「先生方に教育活動の力（POWER）を提供するサイト」＝「POWER FOR TEACHERS」を開設しました。新型コロナの影響でかつてない困難に直面している学校・先生を応援する企画として、当社と東京学芸大学、東京学芸大こども未来研究所が共同して新たに立ち上げました。

今回SEEDの第4弾は「CREDUON」に掲載された記事に加え「POWER FOR TEACHERS」に掲載され、特に多くの先生方から反響をいただいた記事をアニメアルレポートとして制作し、ご自宅のオンライン環境でもご活用いただけるよう、WEB版でお届けすることになりました。「POWER FOR TEACHERS」では参加型のオンラインイベント等の新アイデアを企画していますので、是非ご期待ください。

ジブラルタ生命はブルデンシャル・ファイナンシャルの一員として2000年4月に営業を開始し、2021年の4月におかげさまで20周年を迎えることができました。今日のジブラルタ生命があるのは全国の先生方をはじめ、多くのお客様や地域の皆さまに支えていただいたおかげであると思っております。心より感謝を申し上げます。

今年はそのような皆様に感謝の気持ちを込めて、周年を通した全国での積極的なボランティア活動や当社のお客様向けにトークイベントを予定しております。こちらも併せて、ご期待ください。



ジブラルタ生命保険株式会社
執行役員
松本 哲

Contents

はじめに

POWER FOR TEACHERSについて

活動制限の中でも、子どもたちが創り、学んでいく学校を。
(2020年6月12日)

デンマークからのエール。
いま、大切にしたいこと、見失ってはいけないこと。

(2020年8月7日)



見た目は変わつても、変わらないもの。今、学校は楽しいです。
(2020年10月23日)

G suiteも動画作りも、楽しむしかない!!
『GEG Nara』でつながりましょう。

(2020年12月11日)

Archive

おわりに

22

21

16

12

08

04

03

02

表紙イラスト

正木 賢一 / Kenichi Masaki

東京学芸大学 准教授
NPO法人東京学芸大・とも未来研究所 理事



Gibraltar
ジブラルタ生命



POWER FOR TEACHERS

SEED

SWITCH ON CREATIVE MIND FOR EDUCATORS
CRÉDUON